

(シリーズ四十一「一回黙読と(かつこ)要約 甲」よりつづく)

文章』 木之助が、いっしょうけんめいになって、ほ 1

らあなを、なおも下へおりて行きますと、やがてはる

かの下のほうで、ゴウゴウゴウゴウという音が聞こえ、

そしてその音のするにつれて、なんともいわれないな

まぐさい風が、下から鼻をついてきますので、さすが 5

の木之助も気味が悪くなりましたが、

「ええ、もうこうなったらしかたがない、ひと思い

に飛びこんでしまえ。」

と、なわの手を放しましたら、そのまま体は地の底へ、

ズドンと落ちこんでしまいました。 10

けれども、身が軽いのでけがもせず、すぐに起き上

がって、あたりを見ますと、ここはまた、うす明るく

なっていて、さっきのゴウゴウという声が、つい鼻先

に聞こえるようですから、そのほうへ進んで行ってみ

ますと、：そこにはまっくらな大きななまですが、いま 15

昼ねのさいちゆうです。

木之助はじつと見て、

『なるほどこれは恐ろしいなまずだ。こんなやつに 18

あばれられた日には、地震がはじまるのも無理はない  
 ……』

と、思いながらまたそばへよって、

「まあ、なんとという大きな口だ。この口で食われよ  
 うものなら、木の根、草の根もたまったもんじゃない  
 …… どうだい、まあ、このひげは！ このひげをふり  
 回せば、たいていの地べたにはひびがはいつてしま  
 うぜ。なにしろにくい大なまずだ…。どうかして退治し  
 てやりたいものだなあ。」

と、考えた。そういううちに木之助は、なにも知らな  
 いでねこんでいるなまずの背中に馬乗りにまたがり、  
 ちようと二本出ているひげを、そのまま ※たづな  
 のかわりににぎって、

「さあ、もうこうすりやだいじょうぶだ。」  
 と、いきなりなまずの横ばらを、ドンとかかどでけり  
 つけました。

ふいに横ばらをけられまして、さすがの大なまずも  
 ねてはいられません。  
 「うーん…。」

問題一 ( ) を下におりて行くと、

ゴウゴウという ( ) が聞こえ ( )

( ) 風が ( ) をついでくるの

で、木之助も ( ) が悪くなったが、

「( ) に飛びこんでしまえ」と、

( ) の手を放したら ( )

の ( ) へ落ちこんでしまった。

けれども ( ) もせず、すぐに ( )

( ) てあたりを見るとうす ( )

( ) なっていて、ゴウゴウという声がつい

( ) で聞こえるようだから、そのほうへ

( ) 行くと、そこには ( )

( ) な大きな ( ) が昼ねのさい

ちゆうだ。木之助は『こんなやつにあばれられたら、

( ) がはじまるのも ( )

はない』と思い、また『この ( ) □

で食われたら、( ) の根、( )

の根もたまらない。この ( ) をふり回

せば、( ) は ( ) が